

LETTER



Contents

- 1 ページ 2019年度修了者の進路結果について
- 2 ページ APO Internship Report (Sarah Frances Strugnell)
- 3 ページ 学生インタビュー (梅田一郎)
- 4 ページ オンライン授業への移行～Econometrics for Public Policy (川口大司教授)

2019年度修了者の進路結果について

公共政策学専攻(専門職学位課程)における2019年度修了者の進路結果について、公共政策大学院のホームページに公開しました。この調査は例年、修了者全員を対象に行っており、2019年度については、2019年8月又は9月、及び、2020年3月に修了した学生126名を対象として実施しました。

調査結果では、「就職(復職者を含む)」が最も多く97名で、修了者全体の77%となりました。その他「就職準備中」が12名(10%)、「進学・進学準備」が9名(7%)、「未定・その他」が8名(6%)となり、割合としては前年度とほぼ同様の結果となりました。

就職者の業種別では、「官公庁(海外)」16名、「官公庁(国内)」12名と、国内外の官公庁に就職した者が一番多く、例年どおりの結果となりました。次いで、「情報通信業」が12名で前年度よりも5名増加となり、「金融(国内)」「金融(海外)」はともに10名ずつで、前年度の人数とほぼ変わりありませんでした。なお、前年度2番目に就職者が多かった「コンサルティング」に関しては8名にとどまり、前年度より5名の減少となりました。

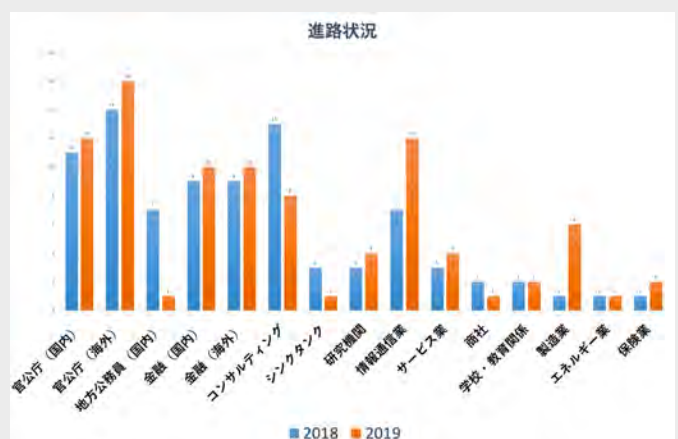
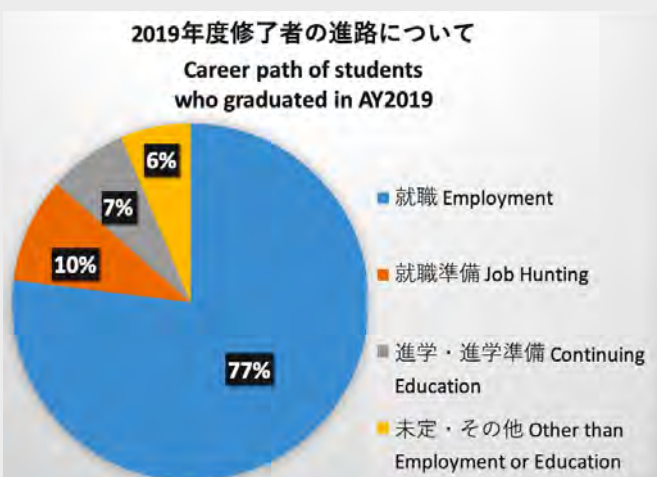
その他、就職先企業の一覧や過去の調査結果は以下のページで公開しております。在校生や本教育部への入学を検討されている方は、ぜひ一度ご覧ください。

●入試結果・修了者進路

<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/admissions/admission-results/>

●公共政策学教育部2019年度修了者の進路について

<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/en/news/2020-07-08-25677/>



APO Internship Report

Sarah Frances Strugnell (MPP/IP, 1Year)



In February 2020, I joined the Agriculture Division at the Asian Productivity Organization (APO) as a Winter Intern from GraSPP. Given my formal undergraduate study in microbiology, I was excited to be assigned to the Agriculture Division so I could learn about the multi-country end-to-end process and assist with

an APO project titled, 'Workshop on Shaping the Future of Rice Value Chains and Policies' held in Tokyo. As an intern working in the Agriculture Division, I was able to combine my background in science, together with my graduate studies in policy and past work experience at a research centre in Australia, to develop my skills across several different projects and initiatives at APO. Having the opportunity to learn from the incredibly experienced staff at APO complemented what I was learning in the classroom at GraSPP and enabled me to apply my theoretical knowledge in a real-world setting.

During my time as an intern at APO, I was able to contribute to internal and external research publications, be involved in project planning activities and contribute to other internal projects. I was also involved in the behind of the scenes support before, during and after six APO Productivity Talks. Before each Productivity Talk, I was involved in anything from scriptwriting, editing, or practising, to checking and providing feedback on PowerPoint slides and attending 'dry runs' (practice sessions) as an observer. I even had the opportunity to communicate internally with other divisions at APO, including IPR and IT, and externally with an expert in the field of agricultural productivity in Asia. During the Productivity Talks, I copied questions from the YouTube chatbox, selected, transcribed and submitted the questions to APO staff to then deliver to the expert. Usually, after helping with each Productivity Talk, I assisted with transcribing the Q&A section as a snapshot summary of the things that were

discussed during the session. In my final week as an intern at APO, I was honoured to go live to present questions from the viewers to an expert during the Productivity Talk on Tuesday, June 23, 2020. This APO Productivity Talk was advertised throughout the GraSPP community on the GraSPP Bulletin Board. The support I received during this session was reflective of the ongoing help and mentorship I received throughout my time at APO. From day one I felt welcomed by all APO staff members. And, despite COVID-19 influencing many of the activities I was initially meant to be involved in, being an intern at APO exceeded my expectations.

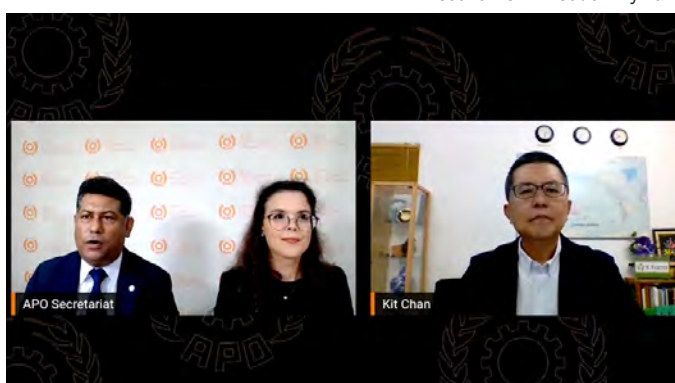
Other than completing my studies at GraSPP, working at APO gave me a purpose to work hard and maintain motivation throughout the semester. The activities I was engaged in had local or international significance, and those activities had short, medium and long-term impacts on the lives of others. During my time at APO, I was also given every opportunity to learn and contribute to many projects. Whenever I asked if I could be involved, there was always someone willing to act as a mentor to teach me within APO. Finally, the work I was involved in every week was exciting, and the nature of the work I was doing was different and often challenging. I was allowed to help with new projects, help solve new challenges, and help with the next five years of project planning at APO. I will always remember this experience as one of the most rewarding components of my time at GraSPP.



▼ Giving a final presentation to the APO staff members



▼ A scene from Productivity Talk





学生インタビュー

第34回

梅田 一郎さん

(公共管理コース / 専門職学位課程 2年)

—GraSPPに入学された、経緯を教えてください

会社を卒業する何年か前から「もう一回腰を据えて勉強したい」と考えていました。私は今、新時代戦略研究所(INES)というシンクタンクで理事長を務めており、財務省や厚労省、研究者、政治家の方々と共に21世紀の日本が直面する社会課題について議論し、政策提言をしています。私は製薬系のグローバル企業に38年間勤めて、ビジネスでの経験値はそれなりにありますが、経済や社会保障などに関する知識や理解が不足していると、常々感じていました。勉強できる場所を探していた時にGraSPPを見つけて、入学説明会に参加してみたところ、非常に面白そうだったので、家に帰って改めて入試要項を確認すると条件的には満たしています。それでチャレンジを決意して受験したところ、幸いにも合格できました。

—入学が決まった時、周囲の方の反応はいかがでしたか？

皆、応援してくれましたし、外国人の知人たちは「いいね！僕も勉強したいんだよ」といった反応でした。入学金を振り込む時は、銀行の窓口の方に「え！ご自身がご入学ですか？おめでとうございます！」と驚かれましたが(笑)。日本では大学卒業後にはMBAくらいしか学ぶ機会がなく、私のように長い社会人経験を終えてから、また勉強する人は少ないので、この部分においては日本は海外に比べて遅れていると感じますね。

—GraSPPに入学してみたいかがですか？

最初は105分間も座って授業を聞いてられるか、正直、自信がありませんでした。でも実際に授業を受けてみると、どの講義も大変楽しいです。GraSPPの授業では社会で実際に起きた事例を扱うことが多く、中には自分の現役当時、仕事で扱ったケースもありました。実体験が伴う分、より授業が分かりやすいのかもしれません。授業中に眠くなったという経験は2019年4月の入学以来、一度もないんですよ。

1年目は経済政策コースを専攻しましたが、2年目は少し幅広く勉強したくて公共管理コースに変更しました。授業は毎回刺激的で、理解力は落ちてないと感じる反面、授業時に「なるほど！」と思っても、その直後に忘れてしまうこともしばしばで…。記憶力だけはどうしようもないですね(苦笑)。

私は職業人として製薬企業という特殊な業界に40年近くいたので、その分野の経験はありましたが、今思えば世間が狭

く、井の中の蛙だったと思います。シンクタンクでの議論についての理解がGraSPPで学ぶ前と今では雲泥の差というほど変わったと実感しています。

GraSPPは先生方も著名な方々ばかりで、非常に贅沢な環境です。本当は40代くらいで入学できれば良かったのですが、貴重な機会を頂いたので、今の学びを今後に生かしていかなければならないと思っています。

—修了後のビジョンや夢を教えてください

『LIFE shift』という書籍がありますが、人生100年時代と考えると、大学卒業から職業人として生きる時間は80年弱と非常に長いです。長い人生の中で、大学や研究機関、地域等で何か新しいことを学び、自分自身を磨く時期を持つことはとても大切だと思います。超少子高齢化社会を迎える日本では、今後さらに社会保障費は増大し、財政は厳しさを増していきます。誰もが健康で、仕事を楽しみ、できるだけ長く職業人として社会に貢献していくことが必要ですし、そのような社会へと変わっていけるよう、気持ちや意識のある人から動き始めていくことだと思います。

私は今年で68歳になりますが、GraSPPでの学びを通して、最新情報と新しいアイデアを持った経験豊富なシニアとして、これからも社会に貢献したいと考えています。

(インタビュー・文責 編集担当)



理事長を務める新時代戦略研究所(INES)での活動の様子

オンライン授業への移行

公共政策大学院 川口大司教授



東京大学は2020年度4月から7月にかけて開講されるS1S2学期の授業を、予定を変更せず、Zoomなどを使った同時双方向でオンライン提供することを3月半ばに決めました。オンラインに移行するための準備の期間は限られていましたが、「オンライン授業・Web会議 ポータルサイト@東京大学」が迅速に立ち上がり、必要な情報が効率よく提供されたので、スムーズに準備を進めることができました。ここには非常に短い動画がアップロードされていて、必要なことがすぐわかるようになっていてとても助かりました。

私の担当授業は英語のEconometrics for Public Policyと日本語の事例研究です。このうちEconometrics for Public Policyは50名くらいが受講している授業で、昨年度までは板書をしながら授業をしてきました。数式がたくさん出てくる内容をスライドを使って講義すると、どうしてもスピードが上がりすぎてしまって、一つ一つの式の意味などが分かりにくくなってしまおうと考えたのです。オンラインになっても

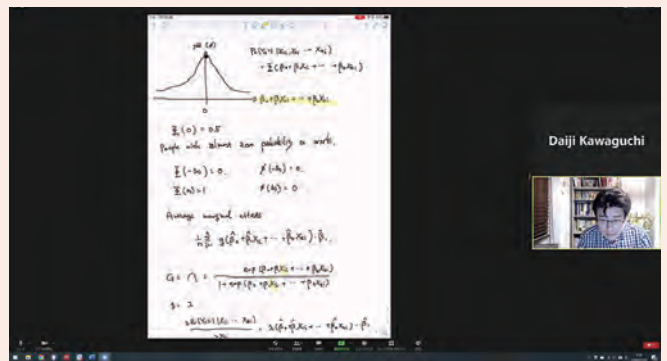
板書形式を変えたくなかったのが、オンラインに板書をどのように取り込むかが課題になりました。最初はホワイトボードの前で授業をしてそれをカメラで撮影していたのですが、途中からiPadのNatabilityというアプリにApple Pencilで書き込むという方法に変えました。ある日の授業の前半をホワイトボードで後半をiPadで行い、Zoomの投票機能を使ってどちらがいいかを聞いてみたところ2/3の学生がiPadのほうがよいと答えたためです。

中間試験と期末試験をどのようにするか悩みましたが、例年通りのテストを持ち込み可という形で行いました。学生にはカメラをオンにしてもらって、ほかの人に手伝ってもらっていないかは確認するようにしました。振り返ってみると毎年教えている内容をすべて教えることができ、中間テストの結果を見る限り、学習の効率は落ちていないように思います。

オンライン授業では、内容が一区切りしたところで質問を催すと、学生が音声やチャットで積極的に質問をしてくれます。その質問や回答の共有もスムーズです。このようなメリットがあった一方で、例年だとこの時期に生まれている学生との一体感には欠けています。学生どうしの距離もほとんど縮まっていないでしょう。一か所に集まり学生が教師の話の聞こえという伝統的な授業形態は知識の伝達以外にどのような意味を持つのか。それをあぶりだす社会実験の一つが終わりました。仲間の影響を測定するピア効果の測定は経済学・社会学・教育学の大きな研究テーマですが、このような研究が進んでいくのではないのでしょうか。



期末テスト終了後の学生の様子
(希望者だけカメラをオンにしてもらい名前は変更してもらっています)



iPadのスクリーンをZoomで画面共有

編集後記

GraSPPでは東京大学の方針に則り、2020年度4~7月のS1S2学期の授業をオンライン授業で実施しました。教職員陣が様々な検討と工夫を重ね、オリジナリティのある授業を作っています。コロナ禍で先が見えず、難しい日々が続きますが、こういった状況だからこそ新しく始められることもある。変化と挑戦の機会だと捉え、一歩ずつ前進して参ります。(編集担当)

vol. 59 NEWS LETTER

【編集・発行】東京大学公共政策大学院 【発行日】2020年8月4日

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp
http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/